

【一般演題5】 第17席 「中医学における「整体観」の科学化に関する研究」

京都 森 和 矢野 忠 唐玉秀 李徳新

（目的）：中医学の特徴は、「整体観（全体観）」と「弁証施治」である。中国の整体観は、まず、人体を各種機能が複雑に組み合わさった有機体と考える。つぎに“心身一如”の存在としての人（全人）と「場」（自然環境）を一つながりのシステムとしてとらえ、このダイナミックなシステムの中で働く病人の自然治癒力（内気）を中薬、鍼灸、気功などの治療手段で賦活することを最高の理想とする医学思想である。

そこで、整体観を構成する概念の中から、「黄帝内経」の基本理念である「人と天地は相応ず」の理論をとりあげ、生気象学および時間生物学的立場からその普遍妥当性を検討した。

（方法）：内気の代表的指標を17-ksとした。健康成人男子の3年間にわたる尿中17-ks排泄量を測定し、昼の17-ks、夜の17-ks、一日平均の17-ksの排泄量毎に集計した。解析方法として、17-ks排泄量、気象要素（11変数）、尿量、生活時間の各変数を入力データとし、大型電算機 ACOS システムで因子分析、周期回帰分析を行った。

（結果）：1) 因子分析の結果、内因、外因、不内外因に相応する5個の潜在因子が抽出され、内経の病理論に妥当性のあることがわかった。

2) 周期回帰分析の結果、主要リズムとして一年周期を得た。17-ks（内気）の一年周期に季節周期（天気）を対応させると、明らかに内気と天気の間と同調現象が見られ、東洋医学で重視する「人と天地は相応ず」の理論モデルに客観的根拠があることを実証することができた。